

衛生巡視での指摘事項の改善推進に関する取り組み

一話せば分かる。「指摘屋」から「改善を支援する技術部」へ

○須恵耕二

電気情報技術系

1 はじめに

黒髪事業所衛生管理者の一人として、毎週一度、職場巡視を行う中で、問題のあった箇所を「改善指示書」に掲載して改善を促すだけという従来の方針では改善が進まないという実態こそ「改善」する必要性があると感じた。そこで、改善を促すために独自の取り組みを行い、改善を大幅に進める事が出来たので報告する。

2 取り組み

改善指示書は、学部長名により改善指示が出され、内容も学部全体に通知される。しかし、電子メールに添付ファイルで配布されるため、それを開いて見るかどうかは教員によって対応が異なる。部局によっては改善推進と結果確認は教員個人まかせである等、改善への意識付けには至らないのが実態であった。職場巡視する側と、安全衛生の管理を行う側の双方に、意識の改革と関係の改善が必要であると思われた。

2.1 電子メールによる「お知らせ」の開始

改善指示書では、初めての指摘でもいきなり学部全体へ公開されるため、教員の間には「衛生管理者は指摘屋」という意識があるように感じられた。そこで、指摘箇所について、まず管理者個人に直接電子メールで「お知らせ」を行い、添付画像で必要箇所を知らせると共に、「安価で簡単な改善方法」の提案と、要望があれば技術部が施工を行えるので相談を、と促す一文を加えた。指摘屋から改善支援の立場への転換である。

2.2 改善指示書の位置づけ

教員とのやり取りが続くうちは改善指示書掲載のための報告を控えた。その上で、教員には3回連続（巡視間隔では4カ月程）で同じ指摘があった場合には、改善指示書へ掲載となり学部長名での改善指示が出される、と加えて改善指示書への記載は「不名誉な事態」という意識を広げるようにした。

2.3 改善の進展

メール連絡に対して教員から返信が届くようになった。その中には、改善を進めるという意思表示だけではなく、何が問題でそうせざるを得ないのかという教員の立場での意見も届いた。また、業者の検査によって問題無しとされた部分を衛生管理者が問題視する根拠は何か、と問われる事もあった。これらのコミュニケーションを通じて、双方が意識を高めることにつながり、数年来放置されてきた箇所の改善が大幅に進む等、目に見えて改善されるスピードが上がっていった。ある教員からは「いきなり掲載される事について不満があった。掲載する前にまず知らせて欲しいと思っていたので、問題箇所のお知らせは大変有難い。」というメールを頂いた。教員の立場を理解した上で、改善を支援する姿勢を打ち出した成果であると感じる。

2.4 安全衛生スタッフ連絡会での要望

この取り組みより、大学全体の衛生管理実務者会議「安全衛生スタッフ連絡会」で、2つの意見を出した。1つは、改善指示書の位置づけを、細かくまた新しい指摘を記載する文書から「記載自体が不名誉な文書」に格

上げ(?)となるようにする事、もう1つは、衛生管理者の指摘根拠となる法的情報の整理および基準の学内統一化である。前者は上述した通りであり、後者については、特に衛生管理者がよく学んで基準を揃えておくことが必要である。これらは現在、大学全体での検討が進められている。

また、「お知らせメール」機能を持つ安全衛生情報管理システムの導入も訴えた。指摘項目のデータベース化の動きはあるが、衛生管理者として目指すべきは情報の集約・整理ではなく、改善が進んで安全かつ衛生的な環境になることの一点である。その為にこそ情報は整理されるべきであり、具体的な改善につながるOutputを持つシステムが導入される事を要望した。(技術部には、それを作る位のノウハウは十分にある。)

3 まとめ

技術部は、衛生管理者としての安全衛生の知識だけでなく、改善を行うための施工技術も有するという点で、もっとも強力な改善支援組織となる事が出来るし、そうあるべきである。このような体制は、民間の衛生管理現場ではあまりない。技術部業務の三本柱の一つ「安全衛生の推進」を実効性がある形で推進し、工学部からの「指摘ゼロ」「改善指示書掲載ゼロ」を目指して、今後も地道ながら取組みを続けていきたい。